

●11月30日(木)、12月1日(金)に、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター、日本財団、笹川平和財団海洋政策研究所の共催事業「海洋教育 教員研修プログラム 第2回フォローアップ研修」が、三浦市で開催されました。北海道から沖縄まで、全国各地で海洋教育に取り組んでいる先生方が32名参加して、熱のこもった研修会となりました。



1日目の最初は、初声小学校の授業公開でした。1、2年生の交流授業で、1年生は、海の生物を紙粘土で作った釣り堀などのお店屋さんに、2年生を招待しました。2年生は、海の生き物を飼ってみてわかったことを1年生に発表しました。1年生の質問にもしっかり答えていました。研修に参加した先生方は、子どもたちの動きや、海の生き物の水槽等を熱心に見学していました。望月先生、金波先生はじめ、初声小学校の先生方、大変お世話になりました。その後、初声



小学校が授業のフィールドとした矢作海岸へ。あいにく満潮でしたが、参加者からは「平坦な磯で、磯の観察がしやすそうだ」という声が上がっていました。三浦半島に特徴的な海成段丘(海岸段丘)の様子もよくわかりました。



海岸見学の後は、会議場所のマホロバマインズへ。最初に、初声小学校の授業についての協議が行われました。職員の自評の後、参加者から「紙粘土で海の生き物を作っているが、実際に観察してから作っているの、子どもたちの感性や愛情が感じられる」「飼っている生き物の死が、子どもにつきつけられると思うが、そこから生命への畏敬の念が育てられれば」等の意見が出されました。次に、東京大学海洋アライアンスの及川先生から「海洋教育の安全の視点：防災・減災から見た海洋教育の展開」の講義がありました。防災教育は「命の教育」であり「子どもたちの未来への投資」であるという言葉が印象に残りました。その後、懇談会で、全国の先生方と交流することができました。



2日目は、ワークショップ1として「三浦市の海洋教育に学ぶこと」というタイトルで、グループ討議をしました。「2年目の教員を研究員にするというのは、後々に大きな力になっていくのでは」「地域のリソースを生かしている」「研究所のような核になる機関があるのが大きい」「実体験が学びに生きている」等、様々な意見をいただきました。三浦市の進めてきた海洋教育に、価値づけをしていただいたのは光栄なことでした。ワークショップ2は、「全国海洋教育サミットに向けて」の話し合いでした。最後に、講評として、東京大学海洋アライアンスの日置先生から、「調べてみてわかったことと、実際に飼ってみてわかったこととの違いに気づき、自分で見極めることが大切であること、海洋教育が日本の教育改革の契機になるポテンシャルを持っていること」などのまとめがありました。その後、三崎恵水産の水産加工場と冷凍庫の見学を行いました。冷凍庫では、みなさん、-60℃の世界に驚いていました。見学後、岬陽小学校の加藤先生から、マグロの授業の流れについて分かりやすい説明がありました。ちょうどマグロ船の出航の様子も見られました。



(文責 事務局 渋谷)